

野洲市景観フォーラム 議事録

概要版

開催日時...平成23年7月23日(土)13時30分～15時35分

会場...市民活動支援センター ホール

1部 基調講演

【課長】 (開会)

【市長】 みなさん、こんにちは。これまで委員会を設けているような議論を公開で積み上げていただいた。今日は委員の方も沢山お集まりいただいた。会場の後ろにはワークショップの成果が貼り出されている。これまで、地域の資源を直接訪れて発掘していただきながら積み上げをしてきていただいた。

野洲市では、これまで景観の取組みが手付かずであったが、今後、「条例」あるいは「景観計画」を定めていきたいと考えている。

景観はいい暮らしをするために重要なものである。いろいろな制約条件があるが、日々「気持ちよく」かつ「安全に住む」ためには良好な景観が不可欠だと思う。

「守る」そして「創る」という両面から、これからの野洲のまちづくりの重要な要素として、素晴らしい景観を皆さん方とともに創っていきたい。計画が出来て終わりではなく、地域が守られるとともに、どんどん良くなっていかないと意味がない。今日は方針を固めるに当たって、皆さんのご意見を伺う場であるが、今後、「計画」や「条例」、あるいはそれぞれの場所での取組み、その大きなステップとして、今日のフォーラムが有益なものになることをお願いしたい。これまでご協力いただいた委員のみなさん方に改めて御礼を申し上げたい。

1部 基調講演

(『今、なぜ景観形成に取り組むのか』)・スライドを見せながら・

【松岡委員長】 私は建築のデザインから出発して、地域や土地などと係わりをもつ中で、環境という枠の中に建築や都市があるという事が分かってきた。その中で景観がいかに大事かを、日々痛切に感じている。

今、なぜ景観形成に取り組むのか、ちょっと堅いが、やわらかく話をさせていただく。

景観は、言葉としては「景観」、「風景」、「光景」、「眺め」など色々ある。「景観」とは、視覚的な情報として得られる環境であり、ある意味では客観性、科学性のある「情報」である。それを見る人の「経験」とか「感性」が一人ひとり異なっており、それが「風景」といえる。いわゆるイメージとして深く焼きついているのが「風景」であり、「景色」である。

「景観10年、風景100年、風土1000年」という言葉がある。「風景」は人の一

生より少し長い。「景観」というものは変わっていくもの。「景観」は人の生活や活動がその場所にすぐ反映されてくる、「風景」はもう少しゆっくりと変わるイメージ。「風土」は人間の一生の間にはほとんど変わらない。

「風土1000年」に関して、東北地方では「1000年に1度」という大地震や津波の被害にあわれた。5月に行ってきたが、津波に流され元の風景を成していなかった。こういうことは「1000年に一度」であるが、我々が築き上げてきたものが、たった一夜にして全部なくなってしまう。こういうことも、我々は無情にも経験せざるを得ない。

それでも空は綺麗である。自然に襲われて、自然に癒されるという、自然の中で我々はその一部として生きざるを得ないという事を痛感させられる。

地震があっても、物理的な物はやがて復興していく。それには人間の繋がりが大事で、お互い助け合って生きている。復興というものは「景観を取り戻す」という事とも言える。

富士山は「日本の風景の象徴」である。どこからが山なのか平野なのかがわからない。だんだん山になって、最後に立派にそびえ立っていく。そういう連続性のあるものがすごく大事。すべてが「繋がっている」、「循環している」という事の象徴でもあると思う。こういうものは人間の感性として「すごく安定している」とか「地面と繋がっている」とか安心できる。

山に対してあるのが湖で、「琵琶湖」がもうひとつの日本の「風景」の代表だと思う。野洲はその代表の琵琶湖に面している。

哲学者の和辻哲郎さんが「風土」という本を書かれている。この中には、風土が人を育て、人の考え方や思想にも影響すると書かれている。極端な例であるが、暑い中では物事をあまり考えたくなくなる。それは、砂漠地帯のオアシスにある椰子の木の形にも表れている。下からスッと幹が伸び、上でパッと葉が広がるような。発想もそのようになっていくということ。日本は非常に湿度があって木はクネクネ曲がっている。そういうところが、住んでいる人の考え方にも似ている。「風土と人間の思考の関係」が「植物の形、風景」でも非常に似てくる。そういう事が書かれていた。

風景の中に人間の営みが見られるとみんな安心する。何もないとただの眺めであるが、家があったり、煙がたなびいていたりすると、背景の自然と一体になった風景を作りだしていく。人間がいないと「風景」とも「景観」ともいわない。風景の中には人間の営みがあるということがポイントだと思う。

田の苗の一本一本の隙間は、人間が入って作業をするため、育っていく上でお互いを干渉しない距離、そういう間隔を長年の間に淘汰されてきたもの。これが風景になっている。論理的に勝ち得たもの。自然から学んだ一種のデザインといえるかも知れない。

棚田にも相当人間の手が入っている。自然に出来たものではない。滋賀にも相当ある。

水田は、四季折々変わっていく。当たり前前に思っているかもしれないが、とても美しい。この辺の琵琶湖岸の東側は田園が続いている。新幹線からも見えるが、集落がポツポツとあって、このような風景が集まっている所は日本でもそうはない。その中に鎮守の森がある。これもひとつの「風景」。こういうのは滋賀が一番かもしれない。

瓦屋根が続く町並みや宿場町などは日本の典型的な良い風景といえる。こうした古い町並みは、伝統的建造物群保存地区や景観の条例といったもので保存

されている。京都の日本海側には舟屋というものがあるが、こうしたその土地特有のものが日本のあちこちにある。

ヨーロッパに行くと、まちなみの色を揃えたり、屋根の瓦の色を揃えたりしている。まちは全てが建物で構成されているといっても過言ではない。建物以外は、道だったり広場だったりする。パリは典型的。

日本の場合は、昔から、田園集落、町家の造りになっていて、そして仲間意識があって同じような材料で出来ている。そういう美しさがある。要するに、ひとつの小さなものが全体を構成していくような連続した風景の作り方になっている。

中国は今、「近代化」「資本化」によって、古い住宅を壊し、新しい集合住宅に建て替えている。建物が整然と並び、色も揃えているが、ヨーロッパや日本のまち並みと比べて欲しい。その時間が積み上げて来たものを、アジアの多くの町の場合、急激な近代化によって形成される景観は美しくない。

統一されているのが良いのか疑問を持つべきだと思う。それぞれに個性があって、お互い手を繋いでいく。何かルールを守って手を繋ぐのが本来いいのかもしれない。メキシコのまちはこの典型である。

「混在の美学」という言葉がある。個性を出しながらもまち全体が繋がっていく。そういう方法もあるかと思う。

平等院では、後ろにマンションが建っていて、さらに新しいマンションが建とうとしていた。景観審議会では、マンションを建てる人たちにもっと低くして、それでもいいものが出来るのではないかと提議した。今以上悪くなると世界遺産の剥奪があり得ると。

ドイツのケルン大聖堂では、近くに超高層ビルが建ち、景観が壊れるということで、世界遺産が剥奪されようとしたことのある例がいくつかある。

韓国では、洛東川のそばに集合住宅が束になって数キロにわたって繋がっているところがある。隙間もなく、山も見えない。おそらく風も流れてこない。眺めが遮られるのは光も遮られるので景観が良くない。視線が抜けるとか、風が抜けるとかそういうことが非常に大事。

釜山には、看板が多くて建物がほとんど見えないまちがある。面白いと思うが、あまりいい例とは思わない。

中国の西安には二十数キロメートルにわたる城壁が残っている。しかし、その隣までマンションやビルが進出してきている。このあたりに干渉地帯を設けるなどの手立てがマスタープランとして全然ない都市である。せっかく持っている良いものが、どんどん壊されていく状況になっている。

さて、ここからは、なぜ景観形成に取り組むのかをお話ししたい。平成15年に「美しい国づくり政策大綱」が出来た。「観光立国」ということで、外から人を呼んで日本を対外的にもっと見せ観光をビジネスにしようというもの。そういう動きの中で、昔からあったいい景観が、経済や利便性、その他の流れの中で失われてきている事に、非常に危惧を感じて、こういうものが出来てきた。それで「景観法」が平成16年に施行された。「景観をどうするか」という必要性が問われている。

「景観法」は、強制力がある程度発揮できるとか、地域に住んでいる人たちが自分たちでルールを決めていけるとか、それに対して少し支援が出来るとい

った特徴がある。

近江八幡市は景観計画を早くに作った。栗東市は、「百年先のあなたに手渡す栗東市の景観計画」という個性的なタイトルとなっている。彦根市は国宝の城を持っているので先駆けてやった。

野洲市には、「歴史」も「文化」もみんな隠れたように少しずつある。これをどうしていくかがこれからの課題。

野洲は、山や平地があり、そこに川が流れている。琵琶湖があり、ワンセットで綺麗に揃っている。地形的には文句をつけ難いほど、条件が揃っていると言ってもいいかもしれない。

空から野洲市を写した写真を見ると、どこが野洲か分かりにくい。風景には切れ目がない。全体が連なっている。俯瞰的にみると、すべてが連続している事を感じざるを得ない。

だから自分たちの所だけ良ければいいというものではなくて、お互い手と手を組んでやることも大事だと思う。

会場の後ろにあるワークショップの結果を見ると、三上山はやっぱり一番の象徴といえる。私も写真を撮るとき、ついそっちに向かってしまう。

伊勢市では、電信柱を取ったり、看板を取ったり、電線を地中化したり、建物を同じような色とか材料を使ったりなどしてまちなみを整え、観光客が9倍も増えている。川越でも2倍くらいになっている。

何をきっかけにして、景観的なまちづくりをしようかという時に、近江八幡市や彦根市のように「歴史的な資源」と言うものを明記することがある。こうした、試みは沢山ある。

野洲の場合はそれが何かというと、国宝の神社とか、歴史的ないわれのあるお寺とかがあるが、そこを中心にして考える場所ではない。色々な良いものを少しずつ持っている。それらが連携していくとよくなると楽しい野洲らしい「景観まちづくり」になると思う。

景観は、その場所に住んでいる人たちの、生活そのものが外に表出している。自分の家だけ綺麗にしても駄目で、その先の玄関先から庭先までを綺麗する意識が必要だと思う。それをもう少し隣と繋げていくというのが出発点。それが連携して、個から全体へ繋がっていくような意識をまず、皆さんが持つということ。これが基本的にないと「まちづくり」にならない。「役所に期待する」とか、「道路拡張して整理する」とかそういう事ではなくて、一人ひとりの生活そのものを、もう少し見直していく必要があるかもしれない。

今、節電の意識が広がり成功しているように、景観についてもそういう意識を持っていけば、まちは短期間で綺麗になっていくと思う。

ヨーロッパから日本に帰ってくると、日本のまちが灰色に見えてくる。日常生活の中では気づかないが、外国から帰ってくると気づくことがある。景観が汚くなっている、普段そこで生活していると気づかなくなる。常に意識を持つことは大事。日本には、綺麗なものもあるが、意外と雑然として味気のないバランスの崩れた景観の中に、みんな慣らされている状態にあるかもしれない。

だから今、生活の基盤である農業、林業、水産業などを体験したり、自分たちの生活を見直したり、基本的なことを考え直すことは、景観にも繋がっていくと思う。

「人間」、「空間」、「時間」を漢字で書くと「間」という字がある。この「間」

と言うのはとても大事。間というのは、「中間的な」というか、繋がっていることを表している、こういう意識が非常に大事。昔の人はこういうことが分かっていたのではないか。生活を通してすべては繋がっている。我々の周りには人間と空間と時間だけ、すべてが緩やかに繋がっていることが美しい。

これから皆さんと共に、まちづくりにつながる明日の景観を一緒に考えていければと思う。

【質問者 A】 たちまち景観への影響を大きくするであろう出来事が、現在進行形で進もうとしている所がある。ここについて委員会で議論している場面が無かったと思う。たとえば「市三宅」「竹生」の約350区画の住宅地の開発。もうひとつは、野洲駅の北側の約17haが近隣商業地域に変わっていく。容積率が400%。ここからは三上山がとても綺麗に見えるが、その対応はどうするのか。それから篠原駅周辺の景観についてはどうか。

【松岡委員長】 今は、市内の景観全般の話をしている。それが進むと、いくつかの場所を地区に分けて、独自のルールというか考え方がでてくると思う。

【質問者 A】 先ほど申し上げた、現在進行形の「篠原駅」、「野洲駅」、「リバーサイドタウン」を担当されているのが景観の担当と同じ都市計画課。宇治市で平等院鳳凰堂の背景にマンションが建つというところを、先生は「スカイラインを何とか抑える」という形で実績を持っていらっしゃる。野洲市の中でも現在進行形で起ころうとしている事について、具体的に取組んでいただけたらと思う。ご返答いただきたい。

守山市、栗東市、近江八幡市の景観計画や景観条例は非常に特徴がある。野洲市の景観計画や景観条例については、委員長のお立場として、どういう特徴を持って踏み込もうとしていくのかお話しをいただきたい。

【松岡委員長】 委員の方々もそれぞれの立場があって、専門家でもない中で、2時間くらいの間で出来る事は精一杯やっていると。野洲らしさが基本。

【市長】 「篠原」は近江八幡市で、近江八幡市の景観条例がかかっている。

【質問者 A】 近江八幡市にある篠原駅の整備については、野洲市は景観のことに口を出せなくなる。野洲市内の景観にも影響が出てくる。野洲市なりの景観の考え方を、篠原駅を整備するプロセスの中で提示していかないと、野洲市の特徴は出せない。

【松岡委員長】 野洲市は、近江八幡へ意見を言うための武器（景観計画）をとにかく作らないといけない。

【質問者 A】 平等院鳳凰堂の後ろにマンションが建つという直近した問題を、先生は解決した実績を持っておられる。野洲市にも現在、景観に大きく影響を起こすものがあるので、それへの取組みについての、お考えを聞かせていただきたい。

【松岡委員長】 場所によって考え方が違って来る。特に駅前であれば三上山をどう見せるかとかがポイントになると思う。町全体の規模からいうとそのボリューム感とか、駅前に降りた時の景観とか、電車に乗っている時の見え方とか、総合的に色々考えた上で、ルールというか、目安というか、そういうものが景観委員

からの野洲らしい提案として出てくると思う。そういう事をしなければいけないと思う。具体的にどうかというのはまだこれから。

【質問者B】 三上山は、野洲だけではなく、滋賀県のあちこちから見える。もし三上山が見えないというような開発をしたら、野洲だけではなくて滋賀県そのものの景観に大きく影響してくる。

三上山は野洲のシンボル、これが滋賀県のシンボルという形にまでなると、「野洲の開発」イコール「滋賀県全体の開発」に影響することになる。先生はどのように考えるか。

【松岡委員長】 三上山より高いものは絶対建てられない。野洲市の中で普通に開発しても、近くから見えなくなることはあっても、遠くから見えなくなることは心配しなくても良いと思う。ただ、周りから見える事は意識の中では持つべき。

【質問者B】 野洲駅から三上山は、昔と今とでは見え方が違う。

【松岡委員長】 建物のスカイラインで見え方が変わってくる。建物が建って見えなくなってきた。

(休憩)

2部 野洲市の景観形成を考える

(野洲市の景観を考える委員会の報告)

【竹内委員】 景観委員会は、社会生活も、経歴も、全てがバラバラの13名の委員で構成されている。しかし全ての委員は野洲が大好きで、「野洲を何とかしよう」、「外からお客様が来ていただけるような野洲にしたい」という観点では一致している。

第1回の委員会は昨年11月5日に開かれた。初対面なので、自己紹介をして、それから正・副委員長を推薦した。先ほど基調講演していただいた、松岡先生に委員長になっていただき、第1回から大いに議論が弾んだ。野洲を知らなくてはいけないということで、第2回の委員会では、現地研修をしようという事になった。

現地研修は、12月17日に行われた。途中、守山側から、三上山に沿って野洲川が流れる風景、野洲平野の広がりを確認。次の中山道では歩いて、途中、行畑のアンダーパスから間近にある三上山を見て、野洲駅まで行った。

そして、野洲駅の南側ロータリーへ行き、滋賀銀行の建屋の向こうに三上山の頭だけが見えている状況を確認した。

次に、妙光寺山の裾野にある御池へ行き、目の前に新幹線越しに見える野洲のまちなみを確認した。

そして、バスに乗って、菩提寺方面に回り、北桜から希望が丘文化公園、銅鐸博物館、そして図書館を見ながら、JRのガードをくぐり、近江戦国の道である「大津能登川長浜線」から、「野洲中主線」に入り、錦織寺の大いらかが見える頃になると、左右は豊積の里。豊積の原が広がっており、やがて、家棟川の河口から、さざなみ街道へ入り、美しい松並木の浜街道を走り、吉川緑地、最後に兵主神社へ到着。兵主神社の300本といわれている黒松が並ぶ参道を

背に前を見ると、三上山や妙光寺山をはじめとする山並みとその間に広がる景色をみて、「野洲はいいところやね」「この景色を50年後にも残したいね」と言いながら、第2回の現地研修は終わった。

第3回は、3月29日に行われた。その間に、市で、市民アンケート調査や事業所アンケートを実施していただいた。会場の後ろに結果が貼ってあるが、7学区ごとにワークショップをしていただき、直接皆さん方とお会いして、色々なヒント、ご意見をいただいた。それらを市でまとめていただき、その資料で「景観形成方針(案)」が、うっすらと浮かび上がってきた。

そして第4回は5月27日に行われた。市で作成していただいた「景観形成方針(案)」を見せていただきながら、色々議論をした。八田委員が素晴らしい案を出していただき、キャッチコピーが生まれた。

先ほどの委員長のお話や皆さんからの質問を聞かせていただいて、私は、この野洲のまちづくりは、行政だけでなく、5万人の市民みんながそれぞれの立場で出来ること、私たちの地区はこれが出来るよとか、市はそう言っているけれども、それはちょっと違うんじゃないの?とか、そういう話し合いをみんなです手を繋いでやって、30年、50年後に、今の良いところを残し、野洲へ来て良かったね、野洲は良いまちやねと言ってもらえるようなまち、そういう景観を残せるように、みんなでやりましょう。

わたくしもそのお手伝いが出来ればほんとに幸せだと願っている。

(野洲市景観形成方針(案)の説明)

【事務局】 野洲市景観形成方針(案)の概要について、説明させていただきます。

まず、「策定の経緯」であるが、現在、野洲市域では、滋賀県景観計画による景観の取り組みが行われている。しかし、県の景観計画は、広域的な視点で策定されているので、野洲市の特性に応じたきめ細やかな内容とはなっていない。このようなことから、「野洲市の景観を考える委員会」を中心に野洲市の景観について検討を進め、まずは、野洲市の景観形成の方向性をまとめたものとして、景観形成方針(案)を作成した。

なお、景観とは対象物を「見る」ということ、そして、自然景観や歴史景観などは、人々の生活や経済活動などと調和することで、より良い景観となる。

次に、良好な景観形成に向けての課題として、野洲らしい景観の保全、良好な景観の改善・創出、失われた景観について挙げた。

これらの課題を踏まえ、野洲市の景観をどのように形成していくかについて、景観形成の方針としてまとめた。

まず、景観の将来像として、「おおぞらのまち野洲 つながるふるさとの景観」～山から琵琶湖へ 先人から私たちそして次世代へ～と挙げているが、これは、「つながる」という言葉をキーワードにしたフレーズとして提案している。

内容は、大空を背景にした三上山をはじめとする山々から、広がりのある田園を流れる野洲川や家棟川などの河川を経て、琵琶湖へとつながる「空間」は先人たちの知恵と努力によって培われた歴史、文化、伝統と調和し、野洲の魅力ある景観を構成している。

そして、現代に生きる私たちは、先人たちから受け継いだこの景観を、守り、育てることにより、さらに美しい景観として次世代にしっかり引き継ぐという「時間」のつながりを大切にする必要がある。

また、現代に生きる私たちが、野洲らしい景観を守り、育てることにより、ふるさと野洲に対する愛着や誇りを高め、私たち同士の「心のつながり」はもちろんのこと、野洲への来訪者にも「もてなしの心」で接することができる「人間」のつながりに通じていく。

これら「空間」「時間」「人間」のつながりを踏まえ、この将来像を提案させていただいた。

次に、3つの課題の解決に向け、4つの良好な景観形成に向けての基本方針を設定した。

自然、田園、歴史・文化景観が調和した野洲らしい景観の保全、市の活性化と一体的な良好な市街地景観の創出、うるおいのある景観の再生、市民・事業者・公共との協働による景観の形成の4つである。

そして、これら「景観の将来像」および「良好な景観形成」を実現するために、野洲市は景観法に基づく景観行政団体になり、野洲市の特性に応じた景観計画を策定するとともに、他制度も含めた、総合的・一体的な景観まちづくりを進めたいと考えている。

次に、今後については、本日のフォーラム、および7月8日から8月8日まで実施しているパブリックコメントで、市民の皆様からのご意見をまとめ、8月25日開催予定の第5回景観を考える委員会において、市民意見への対応を踏まえ、景観形成方針について、最終的な検討をしていただき、景観形成方針を決定するとともに、市のホームページで公表する予定である。

そして、景観形成方針決定後の流れについては、景観形成方針に基づき、景観まちづくりの当面の目標である野洲市独自の景観計画と景観条例の作成に向けて、委員会を中心に検討いただく。

まず、23年度中に景観計画案と景観条例案を作成したいと考えている。検討内容は、重点地区の検討、景観形成基準の検討、届出対象行為の検討などである。

重点地区については、すでに、滋賀県景観計画において、琵琶湖岸そして大津能登川長浜線沿道など、一定の規制がかけられている区域をはじめ、野洲市の特性に応じて、保全・創出等が特に必要となる優先的に取組む区域を『重点地区』として設定することが考えられる。

想定される重点地区は、自然景観を保全する地区、歴史・文化景観を継承・再生する地区、良好な市街地景観を形成する地区などが考えられる。

このような重点地区内で、建築物の形・デザイン・高さ等の景観形成基準、そして、特に景観に影響を与えるため、届出が必要になる行為等を定めることが考えられる。

なお、これら重点地区内のルールを定めるにあたっては、関係住民などと協議を進め、合意形成を図りながら進めていく。

そして、これらの内容を踏まえ、景観計画案および景観条例案を作成する。その後は、その案について、市民説明会やパブリックコメント等で市民の皆様のご意見をお聴きし、さらに、都市計画審議会の意見聴取、議会の議決等を経て、平成24年度中に景観計画と景観条例を作成する予定である。

市民の皆様には、随時、広報紙やホームページ等で進捗状況をお知らせしていく。

【質問者C】 委員会の案がものすごく凝り固まっているというか、ひとつの見方しか出来てないのではないかという気がする。三上山ありきで委員会が進んでいるのではないか。駅前から三上山を見る必要はあるのか。

駅前にマンションがあったらいけないのか。駅前はむしろ思い切って市街化する方がよっぽど野洲らしいと思う。30階や60階や90階建てのビルは別。10階15階くらいまでだったら頑張っけて市街化するべき。その代わり周りは保護するくらいの気持ちがあっても良いのでは。

【質問者D】 景観形成をするにあたって、やはり誰のための景観形成なのかを、まず決めたほうがいい。その後で、その人にとっての視点場というのはそれぞれあると思うので、その視点場をどうするかというガイドラインをそれぞれ決めたら良いのでは。

【質問者A】 野洲駅から三上山は見えて欲しい。野洲駅は野洲市民にとっての玄関口。もてなしのある玄関口が多い町は、きっと綺麗な親しみやすいホスピタリティあふれる町なのではないか。玄関口に花があれば、それはもてなしの第一歩になる。三上山は、幸いまだその玄関口から見る事が出来る。

キャッチコピーの『おおぞらのまち野洲 つながるふるさとの景観』は素晴らしい。内容を見たときにこのキャッチコピーと繋がっているのかが疑問。

一つ目は『(2)良好な景観形成に向けての基本方針』の中の第二段落『特に、野洲のシンボルである三上山については、視点の対象となる三上山自体を引き続き保全するとともに』というのを、これはどういうことか。

の下から二行目の右端『道路も含めた視点場を設定し』となっている。私は、あらゆるところから見えてこそその三上山だから『おおぞらのまち野洲』になると思う。「ある点から見えるから我慢せえよ」という事じゃなくて、三上山というのは全方位から見えるべき。特に眺望が綺麗なところは、こういう風に「視点場を設けて」っていうのは分かるんですが、「視点場さえあればあとはいい」みたいにはなって欲しくない。

委員会では、「道」に視点を置いた景観の議論がされてきていないと思う。「地域との交流」という意味での「道づくり」を考えてもらいたい。例えば、『旧街道』を「道」として作る必要がある。今は車が通りやすくという視点で作られた。ここを、「人間を大切に作る道づくり」という視点で議論していただきたい。道を作るのは景観作りに非常に影響力があり、効果的。道を作ればそれにつられて周りの景観が美しく形成されていくという流れがある。是非その道づくり、「人間を大切に作る道づくり」、車も通ってるけど、車の運転手は知らず知らず、人を大切にしながら走ってしまう、歩行者を大切にしながら走ってしまう、そういう道づくりを考えていただきたい。

【質問者B】 滋賀県に入ると各駅前にビル・マンションが建っている。野洲にもマンションが少し建ったが、あれ以上駅前にマンションがあったらうんざりすると思う。大都市ではないので。

将来人口が減る中でマンションが建てば、空きマンションがどんどん増える。私は昔マンションを建てて売ったことがあるが、空くと大変な事になる。人口が減ると、大阪・京都にお勤めの方は守山、草津、石山など京都に近い方に移ると思う。

せっかく今、駅前に空いているので、滋賀県の中では一番いいというような駅前を作りませんか。

【質問者C】 私は駅前から三上山が見えなくてもいいと言っているわけではない。ただ、それありきにしなくてもいいんじゃないかと。私も野洲に帰ってきて改札口を出たところで三上山が見えれば安心する。

しかし、そのために駅前を制限するよりは、むしろ積極的に駅前のアサヒビールの跡地のところにもう少し大きな公共施設をもった建物を建てて、そこからきちんと三上山も比良山も見えるそういうビューポイントを作って欲しいと思っている。

「マンションをこれからどんどん建てろ」と言ってる訳ではない。

ただ、委員会の報告書を見るといかにも駅前のマンションを敵視している書き方をしているので、私はそれがどうしても納得できない。

【松岡委員長】 マンションを敵視した書き方になっていましたか？そういう意識はない。しかし、私個人的にはあります。申し訳ないのですが。やっぱり将来100年、そういう単位で見た時に、あのスペースを今の内に確保しておかないといけない。民間に渡ると開発がどんどん進む。こんなチャンスを逃がしてはいけない。民間に渡るとすぐにマンションが建ってしまう。敵視的なことを委員の方々に意識して書いたのではないが、そういう危惧がある。

先ほど、「道」についてご意見をいただいたが、抜けの空間として「道」は絶対確保される。それも景観の要素の一つとして。沿道のまち並みも景観になるが、その抜けていく先も景観の一部になるということで表現したが、解釈が違ってしまったのかもしれない。その点はまたパブリックコメントでご意見をいただきたい。

良い景観の視点は人それぞれである。景観計画策定に向けて、委員会では皆さんの意見を汲み上げたいので、どんどん言っていただきたい。

【A委員】 道のことについて、私が委員会で言ったことがこういう文章になったと思う。委員会で三上山のビューポイントという話が出た。その時にポイントを決めたら、前に建物が建てばすぐにアウトになる。それよりも道路を走って、真正面に三上山が見えるところを特定して、例えば電柱と看板の規制等、そういった事も含めて、その道路を特定して大切にすればよいと思う。

道路から真正面に三上山が見える所ならば、みんながそれを見ていただけはずだと思う。そういう所が市内にいくつかある。そういう所を大切にしたらどうかという話をした。

【質問者A】 今後、景観計画や景観条例を作成することになると思うが、委員の皆さん、あるいは委員長の胸の中にどういうものがあるのか。

近隣の近江八幡市や守山市の景観計画や景観条例は、それぞれ特徴がある。守山市は「三上山を大事にしよう」という大きな項目もある。野洲ならではの特徴の出し方というものがあれば、松岡先生、あるいは委員のどなたかからでも結構なので話を聞きたい。

過去の委員会で私は傍聴者として意見を申し上げたが委員の皆さんまで届いてないような感じがする。このパブリックコメントなり、今日出させていただ

いた意見は、どう扱われるのか。

【松岡委員長】 どのような景観計画を作るかの方針はまだ出ていない。基本的な考え方はまとまってきた。具体的にどうするのかについては、次の段階になってくると思う。

野洲には色々な資源が点在している、それを繋ぐということになると、その繋ぎ方がポイントになり、野洲らしさになるのではないか。景観計画では重点地区を決めて、「その地区はこうあるべきだ」という形になっていく。その線引きが特徴のあるものになる予感がする。それで野洲らしさ、それが「おおぞら」の下にあるんだ、というようなイメージのものが出来上がるのではないかと考えている。

【質問者A】 この景観の将来像の『おおぞら』と『つながる』。それを実現するためにも、守山市は全地域を「景観形成地域」にしている。野洲市も広さは似ているし、「つながり」と「おおぞら」を守るには、全地域をカバーする「景観条例」なり「景観計画」にしてもらいたいと思う。

【松岡委員長】 それはあり得ると思う。

【課長】 パブリックコメントの取り扱いについては、委員会で議論をしていただき、「方針」の決定に反映させていただく。
方針に対する意見については、8月8日まで受付をしているので、沢山の意見をいただくよう、お願いをしたい。
これをもってフォーラムを終了させていただく。

終了